九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代中国都市部における産育方法の形成とその実践：家政婦「月嫂(yue sao)」を中心に

翁，文静
九州大学大学院 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1518487

出版情報：飛梅論集. 15, pp.25-40, 2015-03-31. 九州大学大学院人間環境学府教育システム専攻教育学コース
バージョン：
権利関係：

九州大学大学院教育学コース院生論文集，2015，第15号，25-40頁
Bull. Education Course, Kyushu U., 2015, Vol.15, pp25-40

現代中国都市部における産育方法の形成とその実践

── 家政婦「月嫂（yue sao）」を中心に ──

翁　　文　静*

1．はじめに

近年、人類学、民俗学、福祉学、医学などの視点に立った産育研究が盛んに行われている。2014年に出版された産育関連研究を見てみると、小浜・松岡の『アジアの出産と家族計画 ──「産む・産まない・産めない」身体をめぐる政治』、松岡の『妊娠と出産の人類学 ── リプロダクションを問い直す』、安井の『出産の民俗学・文化人類学』、『出産環境の民俗学』、福島・みついの『産後ケア ── なぜ必要か 何ができるか』などが挙げられる。これらの産育研究では、妊娠・出産のみならず、諸国の伝統的な産後の養生習慣についても言及されている。その背景には産後養生習俗の変容、再構築への関心、及び妊産婦の精神疾患、子育ての孤立という社会問題への関心があると思われる。

中国の月子習俗（産後一ヶ月の養生期間）の変容ともその一例である。例えば、一昔前の中国では、産婦と新生児は家の中で、親戚の世話を受け、様々な禁忌を守りながら、月子を耐えていたが、近年、親族と共に、或いは親族の代わりに、月嫂[(1)]（sao）と呼ばれる月子の専門家が登場し、新しい産育実践を行うようになりつつある。さらに、「月子センター」と呼ばれる施設まで作られ、医者・看護師、栄養士、月嫂たちに囲まれ、月子を積極的に享受する産婦も増えてきている。このような産育習俗の変容に医療関係者などの公的組織の人びと、そして月子専門家である月嫂など多様なエージェントが関与していると思われる。本研究は、中国都市部社会において産婦・新生児に最も密接に関わる月嫂を取り上げ、戦略という視点から、彼女たちの産育方法の取得過程および推進・実践過程を探っていきたい。

2．先行研究の枠組みと研究方法

ここでは、月嫂に関連する先行研究を検討した上、本研究の枠組みを定める。そして、研究対象及び研究方法を確認する。

*九州大学大学院博士後期課程

２－１　先行研究の検討

産後の養生習慣の変容、再構築に視点を当てた研究として、例えば姚、松岡による産後養生に関する研究調査が挙げられる。姚は中国の月子を定義した上で、月嫂の出現の背景、資格を考察し、彼女らの提供する産育サービスの内容を紹介した。姚によると、月子は、出産後ほぼ一ヶ月の間、産婦が起居飲食において守らなければならない一連の規範と禁忌のことである。近年は、都市部では核家族化が進み、母子のケアをする人の確保はますます困難になるため、出稼ぎ女性や仕事を解雇された女性に一定の知識を習得させ、主産前後の女性の家庭に住み込み、妊産婦のケアにあたる「月嫂」を養成している。月嫂の資格ついて、姚は「最初は出稼ぎ女性やリストラされた女性を吸収するためだったが、最近では、その需要の高まりと相まって、サービス内容の充実と規範化をはかり、月嫂の資格化も進められている」と述べている。また、姚は、北京市の「中聖名家月嫂服務中心」のホームページを参考にし、月嫂の提供している産育支援の内容を以下のようにまとめている。産婦の料理や日常起居を助け、食事の合理化をはかる。乳房のマッサージや手入れ、産婦の体の清拭、子宮の回復具合の観察、体型の回復への助言などをする。産後の心理ケアを行い、母乳育児を指導する。新生児の沐浴、スキンシップ、体操、栄養指導、洋服・オムツの着替え、洋服洗い、臍の周りやお尻のケア、黄疸の観察などをする。さらに、新生児の知力の早期開発、嬰児用品や玩具の選択にアドバイスを与える（姚 2009）。

また、松岡は韓国における産後調理院（産後の女性の体の養生を目的に作られ、専門スタッフが常駐し、二週間から四週間母子の面倒を見てくれる施設）に焦点を合わせ、伝統的な民俗習慣が、近代化、市場化と混在している様々な現象を探った。松岡が産後調理院を生み出す背景を①実家の母親の意識が変化し、家庭内での産後調理を支えられなくなっている、②産後の養生を重視する伝統があり、その習慣が現在も生きている、③現在の出産が、女性の身体に大きな負担を与えるものになっている、④助産師や看護師が専門性を発揮する場を欲している、⑤豊かな都市中間層が出現している、と指摘している。また、松岡が看護師、母子病院、漢方医、助産師などの経営する産後調理院のサービス、及びスタッフたちの母子ケアの仕方について紹介し、韓国の産後調理の考え方は、東洋医学の伝統と韓国文化が融合していることであると述べている（松岡 2009）。

さらに、産婦・新生児の身の回りの世話以外に、月嫂の提供する医療行為についても言及した研究もある。例えば、张（2007）が「産婦やその家族は医療者の指導と助けを必要とするが、医療者の欠如によって、医療知識と技術を身に付けている月嫂が代わりに雇われることになっている」と指摘している。また、梁（2012）、杨ほか（2011）らは月嫂雇用の有無を比較し、月嫂を雇う家庭においては、母子ともにより健康に月子を過ごしていることを指摘した。

これらの研究では、家族の代わりに、産後ケアの担い手としての女性たちの提供するサービスの内容、果たす役割などについて言及している。しかし、これらの研究では、女性たちがどのように、様々な産育知識・技術を選択し、伝統的な産育方法(2)と違う新しい産育方法(3)を作り上げるのか、また、このような新しい産育方法を雇用主と関わりの中で、どのように推進し、実践していくのかについては触れていない。

２－２　本研究の枠組み

先行研究の課題を踏まえた上で、本稿では、前川の「戦略的適応」、天童の「育児戦略」、および上野の「生活戦略」という枠組みを援用する。

前川が外的なシステムに対する適応の過程において、特定の社会集団 ── 主に少数の「ミドルマン」── が各自戦略的に外部の文化的形態ないし制度を導入し、社会内部における彼らの政治経済的地歩を維持・強化しようとする「戦略的適応」を記述している。つまり、企業家たちはミドルマンとして外部の制度や要素を戦略的に採用し、それを社会内部における自らの立場に資するものとして用いた（前川 2000）。

天童は育児メディアに注目し、そこに現れる育児状況の変容を、社会構造との関連で考察を行った。天童によれば、育児戦略とは①親の出産・育児としつけの意識や方略、②親自身にも明確には意識されない、社会に構造化された暗黙の戦略、③国家や市場において展開される子どもの産育をめぐる政治的・経済的・文化的戦略である。また育児戦略は産育意識、しつけや教育方法、あるいは子どものケアの仕方など、育児のエージェントである親がどのような育児知識を獲得しているかによって規定される。さらに、このような育児知識は、今日育児書からインターネットに至るまで、多様なメディアを通じて配分されている。つまり、天童が「いまや子どもの世話やしけつについての情報・知識を育児雑誌から求めようとする読者層が広範囲に形成されており、育児雑誌の分析は、現代の親たちの育児状況を読み解くうえで不可欠な作業となっているといえよう」と指摘されている（天童 2004）。

また、上野はジェイムス・スコットの『弱者の武器』で展開した枠組みを援用し、シンガポールにおける海外出稼ぎ家事労働者たちの行動を「生活戦略」と捉え、ペースダウンやサボタージュ、偽りの服従、常習的な着服、偽装された無知、ゴシップ、感情偽装、職場放棄といった様々な抵抗の諸相を明らかにした（上野 2011）。

これらの視点に従えば、新旧、自他という異なるシステム間の境界に新たな産育文化（月子文化）が創出され、月嫂たちなどの文化変容のエージェントを通して、伝統的産育習俗の変化と再構築がもたらされると考えられる。その際に、彼女たちが産育の専門家という新たな地位を獲得するため、「ミドルマン」、「育児のエージェントである親」と同様に戦略的に外部、他者の産育知識・技術を導入しながら、メディアによる産育情報・知識の選択、実践、伝達を行っている（第３節）。しかし、専門職である月嫂たちが「シンガポールにおける海外出稼ぎ家事労働者たち」と相違する様々な「生活戦略」も行われている（第４節）と予想される。

２－３　研究対象及び研究方法

対象者である９名の月嫂たち（筆者を含め）は、上海市で最も規模が大きく、有名なＨトレーニングセンターで訓練を受け、国家試験に合格した20代後半から50代前半の既婚女性たちである。月嫂たちの勤め先に関しては、Ｈ区の産婦人科病院（以下ではＨ病院と称する）で月嫂を務めているのは50代のＣさん、Ｂさん及び40前半のＤさんであり、また、50代のＨさん、Ｇさん及び40代のＡ

表１　月嫂の属性

対象者	年齢	戸籍	居住状況	勤務先	勤務年数
Ａさん	40代半ば	外地	会社の寮	各家庭，２年前から小規模月嫂派遣会社を経営	14年
Ｂさん	50代前半	上海市	市内自宅	Ｈ病院	９年
Ｃさん	50代前半	上海市	市内自宅	Ｈ病院	８年
Ｄさん	40代半ば	上海市	市内自宅	Ｈ病院	１年
Ｅさん	20代後半	外地	会社の寮	月子センター	半年
Ｆさん	40代後半	外地	会社の寮	各家庭	４年
Ｇさん	50代前半	上海市	市内自宅	各家庭	12年
Ｈさん	50代半ば	上海市	市内自宅	各家庭	８年
筆者	30代後半	上海市	市内自宅	Ｈ病院（研修）	半年

さんとＦは主に各雇用者宅で働いている。それに対して、最も若い20代後半のＥさんは主に月子センターでサービスを提供している（表１）。

本稿で用いるデータはこれまでの上海市を中心に行ってきた中国都市部の産育現状に関する現地調査をベースに、2013年３月から翌年の８月の６ヶ月間に渡って、上海市で集中的に行った調査で得たものである。調査は上海市Ｈ病院、及び５名の産婦の自宅で行われた月子実践への観察を中心とし、９名の月嫂たちへのインタビューをあわせて行ったものである。なお、筆者は2013年８月から１ヵ月間の調査中、Ｈトレーニングセンターでの月嫂養成訓練を受け、国家資格を取得し、Ｈ病院で研修する機会を得た。本稿では、上記の観察、インタビューのほか、初心者の月嫂として、他の月嫂及び雇用者と筆者のやり取りも分析対象とする。

３．月嫂による新しい産育法の形成

本節では、月嫂たちがどのように新しい産育方法を作り上げたかを１、新旧知識・技術の融合、２、自他経験の所有、３、メディアの利用の３点に分けて、分析・考察を行う。

３－１　新旧（現代と伝統）知識・技法の融合

ここでは、月嫂たちがどのように、近代医療を基礎とする現代的な産育知識・技術、及び中国本土の土着・漢方に基づく伝統的な産育地域・技術を選択し、矛盾なく融合しているか、その様子について、検討を行う。

まず、今日の上海においては、殆どの出産は、近代医療に基づく病院などの医療設備が整った場所で行われている。産後の養生である月子においても医療化が進みつつあると言える。例えば、月嫂になるための月嫂養成訓練の内容を見てみると、その多くが欧米的な産科・小児科の知識・技術に基づいており、また、養成訓練に関わる講師の殆ども医師、看護師、助産師であることが分かる

（翁 2013）。一方、月嫂養成訓練と並行して各月嫂トレーニングセンターでは、漢方・土着の知識・技術に基づく催乳師及び月子料理栄養士などの特別訓練も用意している。これらの訓練には別料金がかかるが、厳しい競争に勝ち抜き、少しでも高給料を得るため、近年女性の人気を博している。本稿の調査対象である９名の月嫂の中に、上記のような特別訓練を受ける人もいれば（Ａさん、Ｆさん、Ｇさん、筆者）、先輩、後輩から教わったり、資料を渡されたりするという間接的な方法で、このような知識・技術を獲得している女性もいる（Ｂさん、Ｃさん、Ｄさん、Ｅさん、Ｈさん）。さらに、特別訓練以外の土着な知識・技術を自分の産育方法に取り入れる女性もいる（Ａさん、Ｆさん）。以下にＡさんの具体的な事例を取り上げ、月嫂たちの新旧（現代と伝統）知識・技法の融合を見ることにする。

【事例１】14年前から月嫂を務めているＡさんは看護師訓練センターで月嫂の養成訓練を受け、月嫂の資格を得た。Ａさんによれば、訓練内容は主に産婦人科、小児科に関わる医療的、看護的なものであり、講師を務める人びとも主に病院の医者とベテランの看護師であった。また、Ａさんは病院研修や母親学級の参加などを通して、医療関係者、教育専門家から出産・育児に関する現代的な知識や技術を学んだ。例えば、授乳する時の「三貼 san tie（母子の胸、腹がくっつく、赤ちゃんの口が母親の乳頭にくっつく、）」と呼ばれる技術を使ったり、「月子中に、産婦が歯を磨いてはいけない」という伝統的な禁忌に反対し、衛生を考慮した上で、柔らかい歯ブラシを産婦に勧めたり、また、早期教育の考え方に基づき、ベビーマッサージを行ったりしている。

その一方、Ａさんは伝統・土着的な的な知識と技術も積極的に取り入れている。例えば、月子中に産婦の食べる月子料理について、Ａさんは伝統的食材（卵、フナ、甘酒、豚足、鶏肉）を使ったり、薬膳を使用したりしている。また、新生児のお尻の湿疹に関しては、Ａさんは市販のクリームを使わず、出身地四川の紫草（zi cao）を使用している。Ａさんによれば、幼児期に、紫草の使い方、その効果を地元の年寄りから聞き、月嫂になって、湿疹のひどい赤ちゃんに使わせてみたが、市販のモノより効果が高いと評判を得ている。

【事例１】のＡさんのように、殆どの月嫂は現代医療に基づく授乳の仕方やベビーマッサージなどの知識や技術を月嫂養成訓練、病院研修などの経験を通してひたすら吸収するが、単なる医者・看護師もしくは教師的な役割を果たしているというわけではない。彼女たちが同時に現代科学で十分に解決できないこと、触れてないことなどに対して、紫草のような伝統的な・土着的な要素を自分の産育実践に取り入れている。月嫂たちはこのように対立的に見える新旧（現代科学と伝統・土着的産育方法）の産育方法を自分の経験に基づき、矛盾なく必要なものを選択し、実践していると考えられる。

３－２　自他経験の所有

月嫂になる女性の殆どは上記のように現代、伝統両方の知識と技術を持ち、かつ自ら出産・育児経験も持っている。しかし、彼女たちはこれだけではなく、様々なネットワークを作り、他人の産育経験・仕事経験も積極的に取り入れようとする。

上海戸籍の月嫂たちのネットワークを聞いてみると、トレーニングセンターもしくは仲介会社が定期的に開く月嫂交流会、または同じ勤務時間の先輩後輩という答えが一番多い。例えば、雇用者宅で働くＨさんは仲介会社の交流会に積極的参加し、その際に、ベテランの月嫂から上手に仕事をこなすコツを聞き、また、同僚からも出産・育児商品に関する詳しい情報も手に入れたという。また、病院勤めのＤさんは先輩であるＢさんのシフトに合わせ、自分の勤務時間を調節し、Ｂさんを見様見真似で、仕事を覚えたという。

一方、戸籍が外地（上海以外の地方）である女性たちの殆どはトレーニングセンター、もしくは仲介会社の寮に住む。彼女たちが決して快適と言えない寮に住む理由は、単なる宿泊費が安いだけではない。集団でのシャワーとトイレの問題、加えて自分のスペースとプライベートな時間と場所を確保することもできないという問題を抱えながら、彼女たちは「友達ができる」、「学んだ技術を互いに練習できる」、「先輩・後輩から経験を教われる」、「いろいろな情報収集ができる」、「仕事を紹介してくれる」と語っている。筆者が2013年11月にＡさんの仲介会社に訪ねた際に、十数名の月嫂たちが催乳師の資格を持つＡさんを囲んで、おっぱいマッサージのやり方を教えてもらっていた。Ａさんが彼女たちにおっぱいマッサージを実演し、練習させた後、一人の親米月嫂（元のマッサージ師）に全身マッサージの知識と技術を聞いていた。このように、月嫂たちは月嫂同士のネットワークを作り、他人の経験を積極的に取り入れようとしている。

もちろん、月嫂たちは他人から間接的な経験だけではなく、時に自分の出産・育児経験を生かし、雇用者の抱えている問題を解決している。例えば、Ｅさんは哺乳瓶に拒絶反応を示す乳幼児を持つ母親に対して、「私の息子も昔そうだった。私は母親に教わり、息子が眠そうな時に、哺乳瓶を与え、慣れさせた」とアドバイスし、雇用主の赤ちゃんに実行し、成功させたという。また、筆者がＢさんと一緒にある雇用主の自宅に訪ねた際に、雇用主から「退院してから、娘が夜中によく起き、昼間に起こせないほど寝ている。そのため、世話する大人たちが疲れている」という悩みを打ち上げられた。筆者が自分の子育て経験を思い出し、赤ちゃんの置かれる環境のことを雇用主に尋ねた。当雇用主が筆者と同じく、赤ちゃんのことを心配するあまり、夜中でも明るい電気をつけ、昼間には風、砂塵、紫外線など防止するため、窓とカーテンなどを閉めっぱなしにしていたため、赤ちゃんに昼と夜を混乱させてしまったことが判明した。そこで、筆者が自分の解消法、つまり、夜に電気を消すか、暗い灯りをつけ、昼間に部屋を明るくするという方法を雇用者に教えた。後日赤ちゃんの睡眠が改善したという報告を受けた。

月嫂たちは仲よくしてもらいたい講師や月嫂同志などに細やかなプレゼントをしたり、お手伝いしたり、或いは頻繁に講師や月嫂同志の目の前に現れ、お喋りしたりして、彼女たちとのネットワークを作っている。月嫂たちがこのようなネットワークに、仕事のチャンスだけではなく、他者の生の産育経験を聞くことも期待している。もちろん、彼女たちのネットワークは不変なものではなく、大きさを変えたり、人が入れ変わったりして、常に流動的に変化している。このことは月嫂自体の流動性の高さにも関連すると思われる。また、月嫂たちは他人から得た知識・技術に頼って産育方法を作っていくが、時に、自らの育児経験をも活用している。言い換えれば、月嫂たちが他人の間

接的な経験と自分の直接な経験を同時に所有し、状況に合わせて、それらの経験を使いこなしているということである。

３－３　メディアの利用

月嫂たちは自分の身の回りの産育情報、とくに入手しやすい育児書やインターネット上の産育情報を積極的に利用しようとしている傾向がある。調査対象である９名の月嫂のうち、最も情報収集に力を入れているのがＦさんである（事例２）。

【事例２】若い時に、「はだしの医者」[(4)]を務めたことがある40代後半のＦさんは絶えず新しい出産・育児の知識を吸収し続けている。Ｆさんは他の月嫂と比べるとメディアからの情報収集により力を入れている。数年前に、あるアメリカ留学経験を持ち、外国企業の管理職に勤めた雇用者宅で働いた時に、雇用者の持っている育児の本崔玉涛の『図解家庭育児シリーズ』、松田道雄の『育児の百科』、Tracy Hogg・Melinda Blau の『嬰语的秘密（Secrets of the Baby Whisperer）』など）を暗記できるほど繰り返し読み続けた。Ｆさんによると、これらの本に書いてある知識、特に小児医療に関するものは実用的であり、後の仕事（例えば、本に書いている症状と対処法を覚え、ある乳幼児の病名を判定し、病院に行かず、治療を行った）に非常に役に立ったという。

また、Ｆさんは読書が大好きで、休みの日に古本屋に足を運び、出産・育児に関連しそうな本を買い集め、読み続けている。彼女のお気に入りの本を見てみると、妊産婦の飲食・養生から民間・土着療法、ツボ・経絡や母子ケアまでと様々である。Ｆさんはこれらの本の知識を使い、とくに産婦の飲食に力を入れ、多くの産婦から信頼されているという。例えば、Ｆさんは月子料理の本を参考し、2014年２月に出産した42歳の産婦に、高齢産婦に適応した月子料理[(5)]（腎機能回復のため、黒豆、ゴマの多用、精神を安定させるため、ハスの実を使用するなど）を用意し、彼女の体調を整えた。

さらに、Ｆさんは携帯を通して、インターネット上の産育情報にも目を配り、様々な情報の中から、自分の知識や経験に合ったものを選択している。彼女が最も閲覧しているのが「漢方養生堂」、「FM107.5」、「babydepot」、「母子育児Ｑ＆Ａ」、「上海月嫂」などである。それらの HP の内容は産婦の飲食、運動、童謡、月嫂の仕事、育児トラブルなどを含む。Ｆさんはこれらの情報を自ら取り入れるだけではなく、雇用者や後輩の月嫂たちにも伝えている。

Ｆさんのような様々なメディアから情報を積極的に取り入れた月嫂は少なくない。特に、インターネット上（主に携帯サイト）の産育情報の閲覧・収集に関しては、殆どの月嫂が行っていることが分かった。しかし、育児書に関しては、月嫂の間にある程度の差が現れている。つまり、月嫂の学歴と働く場所によって、読むか否かが分かれている。学歴が高ければ高いほど本に関心があり、様々な産育の本を積極的に読むが、低学歴の月嫂では積極的に読む人が少ない。また、病院勤めの月嫂よりも、家庭派遣の月嫂のほうがより多く育児書に接する機会が多い。その理由の一つは各家庭において育児書を用意する雇用者が多いことにある。さらに、筆者の予測に反して、産育情報を最も入手しやすいと思われるテレビを利用する月嫂は少ない。その理由を尋ねてみると、「雇用者宅でひたすら働くため、テレビを見る時間がない」、「寮に戻っても、テレビがない」などがあげられている。

以上、具体的な事例を挙げ、月嫂たちの産育方法の習得を、彼女らの立てた１、新旧知識・技術の融合、２、自他経験の所有、３、メディアの利用のという三つの戦略から見てきた。彼女たちは自らの生活経験、学歴、就業年数、勤務地などに合わせて、柔軟に新旧の知識・技術、自他の産育経験を選び取り、独自の産育方法を作り上げると同時に、入手できるメディアを積極的に利用している。

４．月嫂による科学的な産育技法の実践

以下では、月嫂たちが雇用者との交渉過程における戦略を１、言葉による専門性の誇示、２、身体技法の使用、３、インシアティブの発揮に分け、考察を行う。

４－１　言葉による専門性の誇示

ここでは、月嫂たちが雇用主の質問、あるいは自分の行為などに対して、医療関係者より多く専門知識を用いて、言葉で対応する傾向が見られる。筆者がＨ病院で研修した際には、小児科医者、産婦人科医者は一日一回だけ入院患者に顔を見せるのみ、質問がされない限り、自ら積極的に説明したり、情報を与えたりしない。看護師たちも自分の行う医療行為について、自ら解釈したりすることは滅多にない。むしろ、彼女たちが産婦らに「何時に注射する」「何時新生児をお風呂にいれる」などの明確な指示を出していた。それに対して、月嫂たちの言葉による説明、特にわざわざ現代医療の用語を使って説明する様子がかなり多く観察されている。

例えば、病院勤めのＢさんは一人っ子である若いカップルに雇われる際に、様々な質問を受け、丁寧に答えた。新生児がミルクを吐き出すのを見て、慌てて叫んだ雇用主を見ると、Ｂさんは「大丈夫だ。新生児の胃の形はトックリのように口が広いため吐きやすい。寝かせる際に、顔を横にしてください。吐いても窒息することはない」と説明し、落ち着かせた。また、Ｂさんは産婦の家族が作った月子料理を見て、「フナのスープを飲めば、母乳がたくさん出る。しかし、今日は産後二日目で、産婦の乳腺はまだ開通してない。今飲んでしまえば、分泌した母乳が少なく細い乳腺に詰まり、乳房が腫れて硬くなる恐れがあり、ひどい場合、乳腺炎になることもある。乳腺が開通するまで、卵スープのようにあっさりした食べ物・飲み物を与えたほうがよい」とアドバイスした。このように、雇用主の質問、自分の行為などに対して、専門知識などを用いて、言葉で対応する月嫂がＢさんだけではない。Ｂさんと同じ病院に勤めているＣさんも新生児月経について、「女の子の赤ちゃんの性器からよく血が出ている。これは新生児月経と言い、お母さんのホルモンの影響によるもので、殆ど１週間後なくなる。とくに心配する必要はない。性器を綺麗に拭いてあげてください」と説明している。また、研修生である筆者が授乳の時間について聞かれた際に、以下のように回答し、産婦らを納得させた。大体片方ずつ15分間授乳する。母乳には「前乳」と呼ばれるたんぱく質、糖質、水分含量が多いものと、「後乳」と呼ばれる脂質含量の多いものが両方含まれる。片方ずつ15分間を赤ちゃんに吸わせると、バランスよく母乳の中の栄養分をとることができる。

このように、月嫂たちは「乳腺炎」、「新生児月経」、「前乳・後乳」のような専門的な知識と言葉を用いて、自分の正統性、科学性、専門性を雇用主に対して説得的に示している。一方、産育実践の中で、すべてのことを言葉で説明できるというわけではない。特に自分の意志をはっきり伝えられない新生児を扱う際に、月嫂たちが各自の身体技法に頼りにして実践を行う場合が多い。

４－２　身体技法の使用

月嫂たちは新生児もしくは産婦の世話をする際に、常に、様々な身体技法[6]を使用している。以下ではＧさんの事例を取り上げ、月嫂たちの行う技法を見ていく。

【事例３】Ｇさんは、30代の産婦の自宅に面接しに来た初日に、雇用者に「生まれたばかりの新生児が柔らかすぎて、お風呂をさせるのが怖い。お手本を見せてください」と言われ、その場で新生児のお風呂及びその後の赤ちゃんマッサージを行った。Ｇさんが産婦の家族と共に部屋を暖め、洗面器・ベビーバスの中の水温を調節し、ソープ、フェースタオル、バスタオル、着替、綿棒、ベビーオイルなどを準備した。Ｇさんはまず、新生児を仰向きに寝かせ、フェースタオルを四つ折りにして、新生児の目、顔、耳という順番で洗顔した。そして、片手で新生児の首、腕で新生児の体をしっかり支え、もう片手で新生児の髪を素早く洗った。次に、Ｇさんが新生児の洋服を脱がせ、優しくお湯につからせ（新生児が最初泣き出そうになったが、Ｇさんが安心感を与えると言い、新生児のお腹に脱がせた洋服を巻いた）、新生児の体を上から下、前から後ろという順番で洗った。お風呂の後、Ｇさんは近年中国都市部で流行しているベビーマッサージも行った。彼女が最初に赤ちゃんの全身にベビーオイルを塗り、頭部のマッサージを行った。続いて、脇から肩と対角線を描くように、左右の手で交互に流した後、へその周りに円を描くように、時計回りに数回流した。次に、両腕を両手で左右に動かしながら肩先から手のひらに向かい流した。腕のマッサージの後に、Ｇさんが同じ方法で脚を付け根から足先に向けて両手で流した。最後に、赤ちゃんをうつぶせにさせ、首や背中全体を上からお尻まで、両手交互になでおろした。

Ｇさんがこのような一連の熟練した技法を駆使し、保護者らが最も心配する赤ちゃんのお風呂及びマッサージを完全かつ快適に行った。この間、赤ちゃんの父親が初お風呂を記念するため、Ｇさんと赤ちゃんをビデオで撮り続けた。父方祖母が最初は不安そうで、恐る恐るＧさんに孫を渡したが、Ｇさんの熟練な動作、及び赤ちゃんの反応（首・背中のマッサージをする際に、赤ちゃんが頭をあげる動作など）を見て、徐々にＧさん信頼し、マッサージの直後にＧさんを雇うことを決めた。Ｇさんがお風呂とマッサージの場面に限らず、産育実践の様々な場面に、熟練した技法（例えば、短時間でゲップをさせる技法、沢山のミルクを飲ませる技法、湿疹を防ぐ日光浴の技法）を使い、雇用主を納得させたり、自分の専門性を誇示したりしていた。もちろん、Ｇさんは余裕のある際に、技法に合わせて、言語による説明をする時もある。しかし、雇用主らが彼女の技法を評価した上で、初めて彼女の言うことを聞き入れてくれたとＧさんは言う。

上記のお風呂及びマッサージの技術以外、月嫂たちは、自分の身体的特徴、習慣、好みなどに合わせて、「塞（sai）」[7]と呼ばれる授乳技術、ゲップさせる技術、片手で赤ちゃんを抱っこし、もう

片手で赤ちゃんのお尻を洗う技術、母乳出によい料理術、乳房トラブルの解消のキャベツ湿布技術なども多様に使っている。面白いのが、様々な理由で、雇用者に隠して技を使う月嫂もいる。例えば、病院努めのＢさんが雇用主に見られないように、小指で上手にミルクを飲めない新生児の顎を押し上げ、授乳させるのが後者に相当する。彼女によると、この技術を雇用主に見せてしまうと、「わが子を粗末に扱う」と誤解される恐れがあるためであるという。

４－３　インシアティブの発揮

この節では、月嫂たちが雇用者との交渉過程において、彼女たちの取るインシアティブについて考察を行う。

まず、病院勤めの三人（Ｂさん、Ｃさん、Ｄさん）は一日12時間勤務中に、最大12組の親子の世話をしている。月嫂たちは雇用主に自分の携帯番号を教え、何かあれば電話くださいと伝える。しかし、彼女たちが雇用主に呼び出されると、すべて彼らの指示通りに働くのではない。大半の場合、月嫂たちが雇用主に何らかの指示を出しながら、動いている。出産直後の産婦と新生児が病室に入ると同時に、月嫂たちがまず親子の様子を確認する。異常のない場合、彼女たちが付き添う家族に「しばらく休ませてください。新生児が泣いたら電話してください」、「産婦の体を拭くので、着替え、大小二つの洗顔器を用意してください」などを伝える。その後新生児の状況（飲む量の違い、排泄の間隔、黄疸の有無など）母親の状況、家族の態度などに合わせて、柔軟に彼らに対応する。月嫂たちが病院の一日のスケジュールを活用し、自分の働きやすくようにアレンジする。以下では定型的な昼勤務のパターンを紹介する。

出勤直後に、月嫂たちが一斎に産婦らの体を拭く。一時間後に、集団での新生児の沐浴に携わる。沐浴は主に看護師が行うが、月嫂たちが目薬の投与、臍帯の処理、着服などを手伝う。沐浴後、月嫂たちが新生児らにミルクを飲ませるか母乳哺乳の指導を行う。これらの作業を終わらせると、お昼の時間になる。ミルクを飲ませることで、殆どの新生児が眠るため、月嫂たちはゆっくり昼ごはんを食べ、一休み取ることができる。午後２時前後になると、時間の差があるものの、新生児が続々と起き、月嫂たちがオムツを替え、再度の授乳を行う。その際に、雇用者の疑問に答えたり、トラブルを解消したりする。しかし、産育のことをよく分からず、一人である我子のことを心配するあまり、頻繁に月嫂を呼び出す雇用者に合うと、月嫂たちはよく「私たちはプロだから、任せてください。いちいち呼び出さなくても、時間が来たら、様子を見に来る」、「他の雇用者の世話をしているから、終わり次第見に行く」と言い伝える。午後４時以降、月嫂たちに再び休みの時間が訪れる。彼女たちはおやつを食べたり、お喋りしたり、親切な雇用主のところに行ったりする。５、６時になると、月嫂たちが三回目の授乳とオムツ替えに関わり、終わると、夜勤の月嫂たちと勤務交代を行う。このようにして、病院勤めの月嫂たちは出勤直後の７時、午後２時、午後５、６時前後という三つの時間帯に仕事を集中させ、インシアティブを取っている。

一方自宅勤めの月嫂たちが好む一言は「不是要我做什么、而是我要做什么（やらされるのではなく、私がやりたいことをやる）」ということである。彼女たちは面接の日に、雇用主に哺乳瓶の本

表２　Ｈさんの一日

時間	新生児関連	産婦関連	自身の起居生活
６時	哺乳瓶の消毒		起床、歯磨き、洗顔
７時	洗顔、排泄物の処理、哺乳、寝かす		
８時		朝食作り（ぜんざい、饅頭、お粥、甘酒と卵など）	朝食
９時	赤ちゃんのお風呂、マッサージ、寝かす。ベビー服の洗濯		
10時		おやつ作り（ケーキ、ぜんざい、甘酒と卵など）	自分の部屋の清掃
12時		昼ごはん作り	昼ごはん
13時	排泄物の処理、哺乳、寝かす、哺乳瓶の消毒		
14時			昼寝
17時	哺乳、排泄物の処理	体を拭く、傷口をチェック	
18時			晩御飯、お風呂、洗濯
21時	哺乳、排泄物の処理、寝かす		睡眠
２時	哺乳、排泄物の処理、寝かす		睡眠

数、消毒器のメーカー、タオルの枚数、新生児服装のデザインなど用意してもらいたいものを自分の好みに合わせて細かく指示する。そして、働く日から、「正しい（新生児の良い生活習慣を培う）」スケジュールを作り、雇用主に合わせさせる。例えば、Ｈさんが以下のスケジュールを作ったことがある（表２）。

Ｈさんによると、自分の作ったスケジュールを提案する際に、専門知識に基づく説明をすれば、雇用主の指示を得られやすいという。彼女が、雇用主に「早起き早寝という習慣を身に付けさせるため、朝７時に起きるように一日のスケジュールを調節する」、「新生児大体４時間おきに授乳する。それに合わせて、産婦の食事を作ったり、自分の休憩を取ったりする」などを説明する。また、詳細な日記をつけ、雇用者に見せながら、自分のスケジュールを納得させる月嫂もいる（Ｆさん）。Ｆさんは、泣き始めた新生児にミルクを与えたい父方祖母を見ると、自分の日記を確認した上、「１時間前に70ml を飲ませたばかり、今授乳はダメだ」とその祖母を止めたことがある。

以上、月嫂たちが雇用者との交渉過程において、専門的な言語、無言の身体技法およびインシアティブの発揮という戦略を使用し、自分の正統性、専門性を示している様子ついて考察を行った。

５．全体的考察

以上、月嫂の事例を挙げ、彼女たちがどのように新しい産育法を身に付けたのか、雇用主との交渉の中、どのように戦略的に推進・実践を行うのかを明らかにした。まず、月嫂たちの新しい産育

方法の習得、形成に関しては、以下の通りである。

本稿では、現代中国都市社会に登場した産後養生の新たな専門家である月嫂を月子文化変容のエージェントと見なし、彼女たちの形成した新しい産育方法について考察を行った。月嫂たちは現代医療・教育に基づく科学的な産育知識・技術と伝統的な・土着的な知識・技術を融合し、他人の産育経験と自分の経験を併用し、さらに、様々なメディアの影響を受けながら、独自の「新しい産育実践」を作り上げた。しかし、彼女たちの独自な産育法には共通する部分もある。それは現代医療・教育に基づく科学的な産育知識・技術を中心・基礎としていることである。例えば、月嫂養成訓練の内容の大半は欧米的な産科、小児科の知識、発達などに基づくものであり、授業を行う講師も医師や看護師などである。また、月嫂たちが閲覧している育児書物やインターネット上の産育情報を見ても、科学的なものも多い。ここには、医療・教育専門家と月嫂・産婦の力関係、あるいは、医学・教育学が産後の養生にまで浸透・支配し始めているという現代中国都市の状況が反映されているように思われる。その背景としては、「一人っ子政策」を堅持する中国において、病院施設を中心とする妊娠・出産の拡大は国による人口管理に結びついていること、そして、1980年代から人口政策とセットとなった出産・子育て面での諸政策（特に1999年の時から、各地方政府の教育部門が、知育を含んだ0歳からの「教育」にも、責任をもつことになった）などである。

一方、月嫂たちの持ち得る情報・リソースを見てみると、科学的とされるものだけではないということが分かった。例えば、Aさんは薬膳料理と土着の紫草を使用し、産婦に月子料理を提供したり、新生児の湿疹を治したりしている。また、Eさんは哺乳瓶を抵抗する乳児に自分の母親の経験を活用している。さらに、Fさんは松田道雄などの育児書と同時に、漢方養生、ツボ・経絡の本も購入し読み込んでいる。つまり、科学的な産育知識・技術と矛盾しない、もしくは現代医療・早期教育が言及されていない部分に関しては、月嫂たちが伝統的・土着的なもの、もしくはシニア世代の経験をも選び取り、積極的に取り込んでいる。言い換えれば、彼女たちは科学的な産育法に補足・補完するため、伝統的・土着的な産育法を再発見・再利用していると言えよう。また、月嫂たちの作り上げたこのような産育法は固定的なものではなく、流動的なものであり、日々の生活の中で、様々な人びとと関わりながら、絶えずに変化し、更新しつつあることを忘れてはならない。

次に、月嫂たちが雇用主との接触、交渉の中で、どのように戦略的に新しい産育方法を実践しているのかについてまとめる。月嫂たちの産育実践の際に、時にはBさんやCさんのように専門用語を使い、時にはGさんのように高度な技法を駆使し、自分の正統性、専門性を雇用主に示している。また、彼女たちが雇用者との交渉過程において、インシアティブを取り、母子の世話と自分自身の体調管理の両方をしっかり行っている。

上野がシンガポールで家事労働者として雇われているインドネシアやフィリピン家事労働者が、ゴシップ、偽装された無知、サボタージュ、偽りの服従などの生活戦略を利用している様子を明らかにしたが（上野 2011）、本稿の事例からは、それと相違する月嫂たちの戦略が見られることが分かる。言い換えれば、彼女たちが専門的な知識・技術を言語表現、身体技法およびインシアティブの発揮という戦略の使用によって雇用者に示している。ここには、雇い主と家政婦との上下・強弱

関係、あるいは両者の間の不均衡な力関係の構図が揺るぎ始めていると見ることができよう。

最後に、本稿では月嫂による新しい産育方法の形成及びその実践・推進について、月嫂の観察や語りを中心に記述したが、彼女らを雇う産婦及び家族ら受け入れ側の視点については今後の課題として残されている。雇用者側の受け入れ方や月嫂との交渉の直接的場面に関する質的検討を重ね合わせることによって、中国都市部の産後養生習慣の変容。再構築と動態のさらなる全容が明らかにできるだけではなく、日本の産育問題を考える上で何らかの参考になると考える。

＜注＞

（1）「月嫂」とは、月子期間中に産婦および新生児の世話をする専門の家政婦のことであり、正式的な名称は「母嬰護理員」である。「月嫂」は掃除、洗濯など、家事全般を代行するだけではなく、母体回復に効果のある薬膳料理も作る。加えて、乳房按摩や哺乳指導、さらに赤ちゃんの世話と、さまざまな仕事をこなす。

（2）伝統的な産育方法とは、出産後ほぼ一ヶ月の間、産婦が起居飲食において守らなければならない一連の規範と禁忌のことである。月子の規範と禁忌は具体的に飲食と日常の起居行為に大別できる。飲食に関しては「塩分の多いもの、冷たいもの、硬いもの、刺激のあるものは厳禁され、野菜や果物は体が冷えるのでよくないとして制限される」また、起居行為に関しては、「冷え、風にあたるのはよくないという理由で、歯を磨くことや体や髪の毛を洗うこと、密閉状態の部屋から出ることなどが禁じられ、産後は骨盤や骨の関節が緩んでいるので、読書や家事など体を動かすこと、赤ちゃんの世話などが禁じられている」である（姚 2009）。

（3）新しい産育方法とは、第１に、伝統的な厳しい規範を緩め、不合理な禁忌を破りつつ、産婦と新生児の日常的な世話を中心に産育支援を行うことである。例えば、飲食禁忌に関しては、伝統的に果物・野菜など冷たいものを避けることがよいとされているが、新しい月子では、便秘の解消、バランスのよい食べ物の摂取のため、果物を食べることがよいとされている。第２に、月嫂の行う新しい産育支援には現代科学に基づく知識・技術などが加えられていることである。具体的に、栄養学、現代医学・看護学、保健学、教育学・心理学など現代科学に基づく知識・技術である（仇 2013、陰 2011、胡 2012）。

（4）「はだしの医者」とは農村衛生員の俗称で、村から選抜され短期の訓練で養成された医療従事者として、地域の医療に従事していた。

（5）月子料理とは、産婦の悪露の排出や、健康回復のため、産後約１ヶ月間食べる漢方を使ったスペシャルメニューである。

（6）身体技法とは、「身体」を技法として捉える概念で、「人間がそれぞれの社会で伝統的な態様でその身体を用いる仕方」（モース1976：121）と、モースによって最初に定式化されたものである。そして、それは、ある特定の社会的過程の中で、様々な身体的所作が模倣行為などを通して無意志的に習得されるありようを主題化している。また、川田順造は、日本とフラ

ンス、そして西アフリカ内陸社会の民族を対象に、いくつの身体技法と物質文化・技術の関連について検討を行っている（川田 1992）。さらに、坂元はモースの技法概念を産育儀礼の領域にも拡張して適応する（坂元・アナトラ 2008）。

（7）　中国上海において、大人たちが子どもの空腹や食欲を考慮せず、その飲食を一方的にコントロールし、強迫的に飲食をさせる慣習がある。これは「塞 sai」と言い、元々「詰める、押し込む」を意味する言葉である。中国人は昔から、子どもが太っていれば太っているほどかわいく、健康、幸福であると考えている。そのため、幸福・健康を象徴する太った子どもに育つように、現在でもお年寄りを中心とする大人たちが子どもに「塞」をしている。

＜参考文献＞

井家晴子（2009）「産後うつのない世界」『アジアの出産 ── リプロダクションから見る文化と社会』勉誠出版

一見真理子（2008）「全人民の資質を高める基礎「早期教育」競争力と公平性の確保」『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店

上野加代子（2007）「シンガポールにおける外国人家事労働者」『アジアの家族とジェンダー』勁草書房

陰秀文（2011）「月嫂：一嫂难求」『走向世界』27

上野加代子（2011）『*国境*を越えるアジアの家事労働者 ── 女性たちの生活戦略』世界思想社

翁文静（2013）「中国上海市における家事労働者の養成プロセスについて ── 月嫂（SAO）を中心に ──」発達社会学研究　第５号

翁文静（2014）「中国都市部における家政婦月嫂の成立と発展 ── 上海市を中心 ──」『国際教育文化研究』九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会14号

落合恵美子，山根真理，宮坂靖子（2007）『アジアの家族とジェンダー』勁草書房

川田順造（1992）『西の風・南の風』河出書房新社

仇朝東（2013）『職業技術鑑定考核指導手冊 ── 母嬰護理』中国労働社会保障出版社

小浜正子，松岡悦子（2014）『アジアの出産と家族計画 ──「生む・産まない・産めない」身体をめぐる政治』勤勉出版

胡晓（2012）「月嫂 让人欢喜让人忧」『爱情婚姻家庭（优生代）』、54-55

馬梅英編（2010）年『十月妊娠、一日分娩』江蘇科学技術出版社

福島富士子，みついひろみ（2014）『産後ケア ── なぜ必要か 何ができるか』岩波書店

佐藤斉華（2011）「労働者という希望 ── ネパール・カトマンズの家事労働者の現在 ──」『文化字類学』

坂元一光，アナトラ・グリシャナティ（2008）「ビュシュック育児とその再編 ── 中国新疆ウイグルの産育文化の一側面」『九州大学大学院研究紀要』第10号

朱家雄（2006）「上海における就学前教育の状況」『幼児の生活アンケート・東アジア５都市調査』Benesse 教育研究開発センター、36-38
天童睦子（2004）『育児戦略の社会学 ── 育児雑誌の変容と再生産』世界思想社
前川啓示（2000）『開発の人類学 ── 接合から翻訳的適応へ』新曜社
松岡悦子（2014）『妊娠と出産の人類学　リプロダクションを問い直す』世界思想社
マルセル・モース（1976）『社会学と人類学 Ⅱ』弘文堂
趙嘉然編（2006）『職業技術・職業資格培訓練教材 ── 母嬰護理』中国労働社会保障出版社
张宏洁（2007）「北京市‘月嫂”从业状况的研究」『中国医疗前沿』２（22）112-114
安井真奈美（2014）『出産の民俗学・文化人類学』勉誠出版
安井真奈美（2014）『出産の民俗学・文化人類学 ── 第三次お産革命にむけて』昭和堂
姚毅（2009）「産後の養成坐月子 ── 中国」『アジアの出産 ── リプロダクションから見る文化と社会』勉誠出版、90-95
杨丽，朱明瑶，尹毅（2011）「月嫂陪护对婴儿健康影响的调查分析」『护理学杂志』
梁秋梅（2012）「月嫂陪护对产妇身心健康的影响」『医学理论与实践』

The Formation and Practices of Childbearing Methodology in Contemporary Urban China. —Focusing on the Confinement Ladies—

Wenjing WENG

In this paper, I focus on the confinement period after childbirth. There are two major parts in this study. 1) The first aim is to understand how new confinement method is formed, and how confinement ladies in the urban cities of China make their choices based on their experience, knowledge and skills. 2) The second aim is, in their practice, how they appeal to their clients regarding their experience and expertise, and introduce new form of confinement practices.

The following is the findings of the first part. 1) The confinement ladies combine the traditional confinement practices with modern medical practices of childbirth treatment. 2) The confinement ladies utilize their personal experiences and others in their practice. 3) They learn from various kinds of media to create the unique confinement practices.

In the second part, when interacting with their clients, the confinement ladies show a high degree of professionalism to their client by using the technical terms of confinement practices, as well as showing a high level of physical practices (bathing and massaging new-born babies).

Lastly, it is to be noted that the formation and practices of childbearing methodology are to be further investigated and discussed by studying the clients and their family point of view.